

## Szondi Testの簡便的利用に関する研究

— Szondi Testの臨床的妥当性に関する基礎的研究 (下) —

奥野哲也

〔抄録〕

ソンディ・テスト (Szondi Test) の施行は1回実施するには、10分を超えない短時間での実施が可能である。したがって被験者に身体的な負担を掛けることが少なく、しかも「好き・嫌い」という、極めて単純なやり方の施行法であるから、心理的な負担も少ない。人物顔写真の「好き・嫌いの選択」といった単純で、簡単な方法であるため、施行年齢も3歳以上から可能であるなど、その適用年齢は驚くほど幅広い。また言語を基本的には媒介しないため、聴覚や言語の機能に障害がある場合や日本語を解さない外国人であったりする場合も、施行に困難をきたす事は少ないなど、他のアセスメント法に較べて適応範囲が広い。施行が簡単であるという事は、検査者の側の場合も、施行技術法習得のための訓練はあまり必要がない。他の査定技法に比較して、様々な利点があるにも係わらず、24時間以上・1週間以内という施行条件が設けられているために、正規法とされている10回施行を完全終了するには、かなりの時間が必要とされ、その結果、即戦力にならないのではないかという疑問が生じているのも事実である。

そこで152人を対象として、1回法と2回目以上の施行で得られた反応の連関係数を産出する調査を行ったところ、かなりの因子反応において関連が認められ、1回法の有用性が明らかになったので報告する。

前回報告では、h因子からp因子までの検討結果を掲載したが、その続編として、それ以降の因子の検討結果とまとめの報告である。

キーワード：Szondi Test, 1回法施行の妥当性, 1回目と2回目の連関

## 検討25：d + 反応について

表27 C衝動像 d + 反応の出現数の調査結果

1 回目の d 因子の反応型	d + 反応型を示した数	d + 以外の反応型の数	合計反応数
2 回目以降も d + 反応	125	130	255
2 回目以降は d + 以外	122	534	656
合計反応数	247	664	911

上記の表から第1回目反応型と第2回目以降の反応型との連関を求める計算（ $\phi$ 係数）では、連関係数 $\phi = 0.307$ となった。小数点第2位四捨五入で $\phi = 0.3$ となり、弱い連関が認められることが明らかになっている。

次に有意差の検定（ $\chi^2$ 検定）を行った。得られた数値は、 $\chi^2 = 85.995$ となる。これは0.1%水準で有意差が認められるものである。

## 検討26：d - 反応について

表28 C衝動像 d - 反応の出現数の調査結果

1 回目の d 因子の反応型	d - 反応型を示した数	d - 以外の反応型の数	合計反応数
2 回目以降も d - 反応	94	162	256
2 回目以降は d - 以外	109	546	655
合計反応数	203	708	911

上記の表から第1回目反応型と第2回目以降の反応型との連関を求める計算（ $\phi$ 係数）では、連関係数 $\phi = 0.217$ となった。小数点第2位四捨五入で $\phi = 0.2$ となり、弱い連関が認められることが明らかになっている。

次に有意差の検定（ $\chi^2$ 検定）を行った。得られた数値は、 $\chi^2 = 42.844$ となる。これは0.1%水準で有意差が認められるものである。

## 検討27：d ± 反応について

表29 C衝動像 d ± 反応の出現数の調査結果

1 回目の d 因子の反応型	d ± 反応型を示した数	d ± 以外の反応型の数	合計反応数
2 回目以降も d ± 反応	16	44	60
2 回目以降は d ± 以外	65	786	851
合計反応数	81	830	911

上記の表から第1回目反応型と第2回目以降の反応型との連関を求める計算（ $\phi$ 係数）では、連関係数 $\phi = 0.166$ となった。小数点第2位四捨五入で $\phi = 0.2$ となり、弱い連関が認められることが明らかになっている。

次に有意差の検定（ $\chi^2$ 検定）を行った。得られた数値は、 $\chi^2 = 25.052$ となる。これは

0.1%水準で有意差が認められるものである。

検討28：d 0 反応について

表30 C衝動像d 0 反応の出現数の調査結果

1 回目の d 因子の反応型	d 0 反応型を示した数	d 0 以外の反応型の数	合計反応数
2 回目以降も d 0 反応	175	160	335
2 回目以降は d 0 以外	225	351	576
合計反応数	400	511	911

上記の表から第1回目反応型と第2回目以降の反応型との連関を求める計算 ( $\phi$  係数) では、連関係数  $\phi = 0.128$  となった。小数点第2位四捨五入で  $\phi = 0.1$  となり、連関が認められないことが明らかになっている。

次に有意差の検定 ( $\chi^2$  検定) を行った。得られた数値は、 $\chi^2 = 14.931$  となる。これは0.1%水準で有意差が認められるものである。

検討29：m+ 反応について

表31 C衝動像m+ 反応の出現数の調査結果

1 回目の m 因子の反応型	m+ 反応型を示した数	m+ 以外の反応型の数	合計反応数
2 回目以降も m+ 反応	393	123	516
2 回目以降は m+ 以外	148	247	395
合計反応数	541	370	911

上記の表から第1回目反応型と第2回目以降の反応型との連関を求める計算 ( $\phi$  係数) では、連関係数  $\phi = 0.390$  となった。小数点第2位四捨五入で  $\phi = 0.4$  となり、連関が認められることが明らかになっている。

次に有意差の検定 ( $\chi^2$  検定) を行った。計算式は省略した。

得られた数値は、 $\chi^2 = 138.888$  となる。これは0.1%水準で有意差が認められるものである。

検討30：m- 反応について

表32 C衝動像m- 反応の出現数の調査結果

1 回目の m 因子の反応型	m- 反応型を示した数	m- 以外の反応型の数	合計反応数
2 回目以降も m- 反応	52	106	158
2 回目以降は m- 以外	32	721	753
合計反応数	84	827	911

上記の表から第1回目反応型と第2回目以降の反応型との連関を求める計算 ( $\phi$  係数) では、連関係数  $\phi = 0.375$  となった。小数点第2位四捨五入で  $\phi = 0.4$  となり、連関が認められ

ることが明らかになっている。

次に有意差の検定（ $\chi^2$ 検定）を行った。得られた数値は、 $\chi^2=128.171$ となる。これは0.1%水準で有意差が認められるものである。

### 検討31：m±反応について

表33 C衝動像m±反応の出現数の調査結果

1回目のm因子の反応型	m± 反応型を示した数	m± 以外の反応型の数	合計反応数
2回目以降もm± 反応	36	80	116
2回目以降はm± 以外	91	704	795
合計反応数	127	784	911

上記の表から第1回目反応型と第2回目以降の反応型との連関を求める計算（ $\phi$ 係数）では、連関係数 $\phi = 0.189$ となった。小数点第2位四捨五入で $\phi = 0.2$ となり、連関が認められることが明らかになっている。

次に有意差の検定（ $\chi^2$ 検定）を行った。得られた数値は、 $\chi^2=32.374$ となる。これは0.1%水準で有意差が認められるものである。

### 検討32：m0反応について

表34 C衝動像m0反応の出現数の調査結果

1回目のm因子の反応型	m0 反応型を示した数	m0 以外の反応型の数	合計反応数
2回目以降もm0 反応	39	86	125
2回目以降はm0 以外	87	699	786
合計反応数	126	785	911

上記の表から第1回目反応型と第2回目以降の反応型との連関を求める計算（ $\phi$ 係数）では、連関係数 $\phi = 0.201$ となった。小数点第2位四捨五入で $\phi = 0.2$ となり、連関が認められることが明らかになっている。

次に有意差の検定（ $\chi^2$ 検定）を行った。得られた数値は、 $\chi^2=36.673$ となる。これは0.1%水準で有意差が認められるものである。

## § 各因子反応型の出現状況の検討まとめ

以上これまで詳しく検討した結果について、検討結果を一覧表にして示したのが、表35である。

表35 8因子32反応の連関係数と $\chi^2$ 検定の結果一覧

全群	因子	反応	$\phi$	$\chi^2$	有意差 検 定
VGP	h	+	0.5	196.98	****
		-	0.4	126.02	****
		±	0.1	19.16	****
		0	0.2	47.55	****
	s	+	0.4	144.65	****
		-	0.4	147.77	****
		±	0.1	5.48	*
		0	0.4	139.19	****
	e	+	0.2	35.51	****
		-	0.2	37.84	****
		±	0.1	4.08	-
		0	0.1	10.63	***
	hy	+	0.2	23.18	****
		-	0.3	110.57	****
		±	0.2	42.55	****
		0	0.2	34.01	****
	k	+	0.3	57.59	****
		-	0.4	131.25	****
		±	0.0	0.75	-
		0	0.3	80.96	****
	p	+	0.4	167.23	****
		-	0.3	75.69	****
		±	0.2	47.11	****
		0	0.1	12.39	****
	d	+	0.3	86.00	****
		-	0.2	42.84	****
		±	0.2	25.05	****
		0	0.1	14.93	****
	m	+	0.4	138.88	****
		-	0.4	128.17	****
		±	0.2	32.37	****
		0	0.2	36.67	****

$\phi$  : 小数点第2位四捨五入  
 $\chi^2$  : 小数点第3位四捨五入  
 \*\*\*\* 0.1%水準で有意差  
 \*\*\* 1%水準で有意差  
 \* 5%水準で有意差  
 - 有意差なし

### 1. h因子における検討

#### h + 反応型での結果

h 因子 + 反応型では、連関係数0.5 (小数点第2位四捨五入) で、 $\chi^2$ による有意差 (196.98) 検定では0.1%水準で統計学的に有意な差が得られた。したがって表4に示したようにh + 因子では、施行1回目反応と施行2回目以降の反応との間に統計学的に有意な連関があることが明らかになった。

#### h - 反応型での結果

h 因子 - 反応型では、連関係数0.4 で、 $\chi^2$ による有意差 (126.02) 検定では0.1%水準で統計学的に有意な差が得られた。したがってh - 反応型では、施行1回目反応と施行2回目以降の反応との間に統計学的に有意な連関のことが明らかになった。

#### h ± 反応型での結果

h 因子 ± 反応型では、連関係数0.1 と低い数値である。一方、 $\chi^2$ による有意差 (19.16) 検定では0.1%水準で有意な差が得られている。したがって施行第1回目反応と施行第2回目以降反応との間に有意差はあるが、有意な連関があるとは言えないことが明らかになった。

#### h 0 反応型での結果

h 因子 0 反応型では、連関係数0.2 で、また $\chi^2$ による有意差 (47.55) 検定では0.1%水準で有意な差が得られている。したがってh 0 反応型では、施行1回目反応と施行2回目以降の反応との間に、統計学的な有意な弱い連

関のあることが明らかになった。

#### h 因子反応型のまとめ

h 因子では、h ± 反応型を除いた他の3反応型（つまり h +、h -、h 0 反応型）で、施行第1回目反応と施行第2回目以降反応との間に有意な連関が認められた。

なお h ± 反応型については、施行第1回目と第2回目以降の反応との間には統計学的に有意ではあるが、統計学的な連関はないことが明らかになった。

### 2. s 因子における検討

#### s + 反応型での結果

s 因子+ 反応型では、連関係数0.4で、 $\chi^2$ による有意差（144.65）検定では0.1%水準で統計学的に有意な差が得られた。したがってs+ 反応型では、施行1回目反応と施行2回目以降の反応との間に統計学的に有意な連関のあることが明らかになった。

#### s - 反応型での結果

s 因子- 反応型では、連関係数0.4で、 $\chi^2$ による有意差（147.77）検定では0.1%水準で統計学的に有意な差が得られた。したがってs - 反応型では、施行1回目反応と施行2回目以降の反応との間に統計学的に有意な連関のあることが明らかになった。

#### s ± 反応型での結果

s 因子± 反応型では、連関係数0.1で、 $\chi^2$ による有意差（5.48）検定では5%水準で統計学的に有意な差が得られた。したがってs± 反応型では、施行1回目反応と施行2回目以降の反応との間には、有意ではあるが、統計学的に有意な連関があるとは言えないことが明らかになった。

#### s 0 反応型での結果

s 因子0 反応型では、連関係数0.4で、 $\chi^2$ による有意差（139.19）検定では0.1%水準で統計学的に有意な差が得られた。したがってh - 反応型では、施行1回目反応と施行2回目以降の反応との間に統計学的に有意な連関のあることが明らかになった。

#### s 因子反応型のまとめ

s 因子では、s ± 反応型を除いた他の3反応型（つまり s +、s -、s 0 反応型）で、施行第1回目反応と施行第2回目以降反応との間に有意な連関が認められた。

なお s ± 反応型については、施行第1回目と第2回目の反応との間に、統計学的に有意ではあるが、統計学的な連関はないことが明らかになった。

### 3. e 因子における検討

#### e+ 反応型での結果

e 因子+ 反応型では、連関係数0.2で、 $\chi^2$ による有意差（35.51）検定では0.1%水準で統計

学的に有意な差が得られた。したがってe+反応型では、施行1回目反応と施行2回目以降の反応との間に統計学的に有意な弱い連関のあることが明らかになった。

#### e-反応型での結果

e 因子-反応型では、連関係数0.2で、 $\chi^2$ による有意差 (37.84) 検定では0.1%水準で統計学的に有意な差が得られた。したがってe-反応型では、施行1回目反応と施行2回目以降の反応との間に統計学的に有意な弱い連関のあることが明らかになった。

#### e±反応型での結果

e 因子±反応型では、連関係数0.1で、 $\chi^2$ による有意差 (4.08) 検定では統計学的に有意な差が得られなかった。したがってe±反応型では、施行1回目反応と施行2回目以降の反応との間に統計学的に有意な連関のないことが明らかになった。

#### e 0 反応型での結果

e 因子0 反応型では、連関係数0.1で、 $\chi^2$ による有意差 (10.63) 検定では1%水準で統計学的に有意な差が得られた。したがってe 0 反応型では、施行1回目反応と施行2回目以降の反応との間に有意な差はあるものの、統計学的な連関はないことが明らかになった。

#### e 因子反応型のまとめ

e 因子では、e±、e 0 反応型を除いた他の2反応型 (つまりe+、e-反応型) で、施行第1回目反応と施行第2回目反応以降との間に有意な連関が認められた。

なおe±反応型については、施行第1回目と第2回目以降の反応との間に、統計学的な連関はないことが明らかになった。またe 0 反応型では、施行第1回目と第2回目以降の反応との間には、統計学的に有意差はあるが、連関のないことが明らかになった。

### 4. hy因子における検討

#### hy+反応型での結果

hy因子+反応型では、連関係数0.2で、 $\chi^2$ による有意差 (23.18) 検定では0.1%水準で統計学的に有意な差が得られた。したがってhy+反応型では、施行1回目反応と施行2回目以降の反応との間に統計学的に有意な弱い連関のあることが明らかになった。

#### hy-反応型での結果

hy因子-反応型では、連関係数0.3で、 $\chi^2$ による有意差 (110.57) 検定では0.1%水準で統計学的に有意な差が得られた。したがってhy-反応型では、施行1回目反応と施行2回目以降の反応との間に統計学的に有意な弱い連関のあることが明らかになった。

#### hy±反応型での結果

hy因子±反応型では、連関係数0.2で、 $\chi^2$ による有意差 (42.55) 検定では0.1%水準で統計学的に有意な差が得られた。したがってhy±反応型では、施行1回目反応と施行2回目以降の反応との間に統計学的に有意な弱い連関のあることが明らかになった。

### hy 0 反応型での結果

hy 因子 0 反応型では、連関係数0.2で、 $\chi^2$ による有意差（34.01）検定では0.1%水準で統計学的に有意な差が得られた。したがってhy 0 反応型では、施行 1 回目反応と施行 2 回目以降の反応との間に統計学的に有意な弱い連関のあることが明らかになった。

### hy 因子反応型のまとめ

hy 因子では 4 反応型すべてで、施行第 1 回目反応と施行第 2 回目以降の反応との間に、弱いけれども有意な連関が認められた。

## 5. k 因子における検討

### k+ 反応型での結果

k 因子 + 反応型では、連関係数0.3で、 $\chi^2$ による有意差（57.59）検定では0.1%水準で統計学的に有意な差が得られた。したがってk + 反応型では、施行 1 回目反応と施行 2 回目以降の反応との間に統計学的に有意な弱い連関のあることが明らかになった。

### k - 反応型での結果

k 因子 - 反応型では、連関係数0.4で、 $\chi^2$ による有意差（131.25）検定では0.1%水準で統計学的に有意な差が得られた。したがってk - 反応型では、施行 1 回目反応と施行 2 回目の反応との間に統計学的に有意な連関のあることが明らかになった。

### k ± 反応型での結果

k 因子 ± 反応型では、連関係数0.0で、 $\chi^2$ による有意差（0.75）検定でも統計学的に有意な差が得られなかった。したがってk ± 反応型では、施行 1 回目反応と施行 2 回目以降の反応との間に統計学的に有意な連関のないことが明らかになった。

### k 0 反応型での結果

k 因子 0 反応型では、連関係数0.3で、 $\chi^2$ による有意差（80.96）検定では0.1%水準で統計学的に有意な差が得られた。したがってk 0 反応型では、施行 1 回目反応と施行 2 回目以降の反応との間に統計学的に有意な弱い連関のあることが明らかになった。

### k 因子反応型のまとめ

k 因子では、k ± 反応型を除いた他の 3 反応型（つまり k +、k -、k 0 反応型）で、施行第 1 回目反応と施行第 2 回目反応以降との間に有意な連関が認められた。

なお k ± 反応型については、施行第 1 回目と第 2 回目の反応との間に、統計学的な連関はないことが明らかになった。

## 6. p 因子における検討

### p + 反応型での結果

p 因子 + 反応型では、連関係数0.4で、 $\chi^2$ による有意差（167.23）検定では0.1%水準で統



計学的に有意な差が得られた。したがってp+反応型では、施行1回目反応と施行2回目以降の反応との間に統計学的に有意な連関のあることが明らかになった。

#### p-反応型での結果

p因子-反応型では、連関係数0.3で、 $\chi^2$ による有意差(75.69)検定では0.1%水準で統計学的に有意な差が得られた。したがってp-反応型では、施行1回目反応と施行2回目以降の反応との間に統計学的に有意な弱い連関のあることが明らかになった。

#### p±反応型での結果

p因子±反応型では、連関係数0.2で、 $\chi^2$ による有意差(47.11)検定では0.1%水準で統計学的に有意な差が得られた。したがってp±反応型では、施行1回目反応と施行2回目以降の反応との間に統計学的に有意な弱い連関のあることが明らかになった。

#### p0反応型での結果

p因子0反応型では、連関係数0.1で、 $\chi^2$ による有意差(12.39)検定では0.1%水準で統計学的に有意な差が得られた。したがってp0反応型では、統計学的な有意な差はあるが、施行1回目反応と施行2回目以降の反応との間に統計学的な連関のないことが明らかになった。

#### p因子反応型のまとめ

p因子では、p0反応型を除いた他の3反応型(つまりp+、p-、p±反応型)で、施行第1回目反応と施行第2回目反応との間に有意な連関が認められた。

なおp0反応型については、施行第1回目と第2回目以降の反応との間に、有意な差はあるが、統計学的な連関はないことが明らかになった。

### 7. d因子における検討

#### d+反応型での結果

d因子+反応型では、連関係数0.3で、 $\chi^2$ による有意差(86.00)検定では0.1%水準で統計学的に有意な差が得られた。したがってd+反応型では、施行1回目反応と施行2回目以降の反応との間に統計学的に有意な弱い連関のあることが明らかになった。

#### d-反応型での結果

d因子-反応型では、連関係数0.2で、 $\chi^2$ による有意差(42.84)検定では0.1%水準で統計学的に有意な差が得られた。したがってd-反応型では、施行1回目反応と施行2回目以降の反応との間に統計学的に有意な弱い連関のあることが明らかになった。

#### d±反応型での結果

d因子±反応型では、連関係数0.2で、 $\chi^2$ による有意差(25.05)検定では0.1%水準で統計学的に有意な差が得られた。したがってd±反応型では、施行1回目反応と施行2回目以降の反応との間に統計学的に有意な弱い連関のあることが明らかになった。

#### d0反応型での結果

d 因子 0 反応型では、連関係数0.1で、 $\chi^2$ による有意差（14.93）検定では0.1%水準で統計学的に有意な差が得られた。したがって d 0 反応型では、統計学的な有意な差は認められるものの、施行 1 回目反応と施行 2 回目以降の反応との間に統計学的に有意な連関のないことが明らかになった。

#### d 因子反応型のまとめ

d 因子では、d 0 反応型を除いた他の 3 反応型（d +、d -、d ± 反応型）で、施行第 1 回目反応と施行第 2 回目反応との間に有意な連関が認められた。

なお d 0 反応型については、施行第 1 回目と第 2 回目以降の反応との間に、有意な差はあるが、統計学的な連関はないことが明らかになった。

### 8. m 因子における検討

#### m+ 反応型での結果

m 因子 + 反応型では、連関係数0.4で、 $\chi^2$ による有意差（138.87）検定では0.1%水準で統計学的に有意な差が得られた。したがって m+ 反応型では、施行 1 回目反応と施行 2 回目以降の反応との間に統計学的に有意な連関のあることが明らかになった。

#### m- 反応型での結果

m 因子 - 反応型では、連関係数0.4で、 $\chi^2$ による有意差（128.17）検定では0.1%水準で統計学的に有意な差が得られた。したがって m- 反応型では、施行 1 回目反応と施行 2 回目以降の反応との間に統計学的に有意な連関のあることが明らかになった。

#### m± 反応型での結果

m 因子 ± 反応では、連関係数0.2で、 $\chi^2$ による有意差（32.37）検定では0.1%水準で統計学的に有意な差が得られた。したがって h - 反応では、施行 1 回目反応と施行 2 回目以降の反応との間に統計学的に有意な連関のあることが明らかになった。

#### m 0 反応型での結果

m 因子 0 反応では、連関係数0.2で、 $\chi^2$ による有意差（36.67）検定では0.1%水準で統計学的に有意な差が得られた。したがって h - 反応では、施行 1 回目反応と施行 2 回目以降の反応との間に統計学的に有意な連関のあることが明らかになった。

#### m 因子反応型のまとめ

m 因子では 4 反応型すべてで、施行第 1 回目反応と施行第 2 回目以降反応との間に、有意差のある、有意な連関が認められた。

#### h 因子から m 因子までの結果のまとめ

したがって h 因子 + 反応型から m 因子 0 反応型までの全 32 反応型で、施行 1 回目反応と施行 2 回目以降の反応との間に、有意な連関の得られなかった反応型は 7 反応型（h ± 反応、

s ± 反応、e ± 反応、e 0 反応、k ± 反応、p 0 反応、d 0 反応) のみで、他の25反応型については、有意な連関があることが明らかになった。

さて統計学的に連関のない結果が±反応型及び0反応型に集中しているという事実は、一体どういうことを意味しているのであろうか。これはつまり施行第1回目反応において、±反応や0反応型を示すということは、反応の意味自体に、+反応とか-反応といったはっきりした傾向を持つ反応ではなく、±反応や0反応といった、葛藤様状態であったり、気分や欲求が低迷したりしているといった、曖昧な(±・0)要素が強いことを意味しており、こうした曖昧な要素が第1回目に出現し、第2回目以降の反応とは連関が低いという事実が集中して表れていることは、ソンディ・テスト学的にはある程度納得のゆく、いわば臨床的な側面では妥当性のある結果であるとも言える。

一般的に±反応は、エネルギーが現在、蓄積されつつある状況であり、0反応はエネルギーが放出されつつある状況を意味する。したがってそれ以後の第2回目施行以降で、その後の反応変化が生じる可能性が高いのは当然のことと、ソンディ・テスト学的には言えるのである。

## § 連関係数の低い反応型についての検討

これまでの上記の調査に明らかになったように統計学的に連関係数が低く、施行第1回目の反応と第2回目以降の反応に関連がないとされた7反応型について、第2回目以降の反応型では、どのような反応型に変化してゆく可能性があるのかを、更に検討してみることにした。

### S衝動像のh因子±反応型の検討

まずh因子±反応型では、有意差はあったが、連関係数が0.1と低かった。この反応型を中心に詳しく調べてみると次のような反応出現になっていることが分かった。

表36 第1回目と第2回目以降の反応型の変化：h因子±反応型

第1回目の反応	衝動像	S	出現率 (%)
	因子	h ±	
第2回目以降の反応型	+	44	50.00
	-	19	21.59
	±	16	18.18
	0	9	10.23
合計		88	100.00

すなわち第1回目のh ±反応型は、第2回目以降では、h +反応型に変化して出現しているのが50.0%で第一位、h -反応型になっているのが21.6%で第二位、第三位ではh ±反応型

として変化のなかったのが18.2%であり、第四位はh 0反応型（10.2%）である。

この調査結果によると、h ±反応型はh +反応型に変化する可能性が50%あるということになる。つまりh ±反応型は、その後の変化における可能性としては、h +反応型の可能性が一番高いということを意味している。表現を変えると、h ±反応型はh +的要素が強いということがいえよう。

h ±反応型は臨床的には、「情愛欲求の葛藤があり、情愛欲求が率直に表出できない状況」を意味しており、それがh +反応型、すなわち「温かい情愛欲求がある」ことを示す反応型に変化していることを示している。

### S衝動像のs因子±反応型の検討

s因子±反応型では、有意差はあったが、連関係数が0.1と低かった。詳しく調べてみると次のような出現状況になっていることが分かった。

表37 第1回目と第2回目以降の反応型の変化：s因子±反応型

第1回目の反応	衝動像	S	出現率 (%)
	因子	s ±	
第2回目以降の反応型	+	49	29.52
	-	44	26.51
	±	49	29.52
	0	24	14.46
合計		166	100.00

第1回目s ±反応型は、第2回目以降では、s +反応型に変化して出現しているのが29.5%で、第1回目と同一反応であるs ±反応型と同率の第一位である。第二位は、s -反応型が26.5%と高い比率を示している。つまりs ±反応型は、s +反応型への変化と共に、またs -反応型への変化の可能性を持っていることが明らかになった。これらは±反応の意味する+反応型傾向と-反応型傾向を同時に示すのが±反応型であるという極めて自明なことも言える。つまりテスト学的には十分うなずける結果ともいえる。もっともs ±反応型に+反応傾向方向と-反応傾向方向があることが、統計学上はっきりしたことで、臨床場面でソন্ディ・テストを解釈する場合には、s ±反応型の場合には、衝動の変化については多少慎重な読みが必要とされることが明らかになった。もともとs ±反応型は、本来なら過激な攻撃性・活動性を抑制する意味はあるが、「攻撃性・活動性を抑制する結果、却っていらいら感を高めて抑制を欠いてしまう」という現実的意味があることを再確認することが必要であることを示す調査結果である。

### P衝動像のe因子±反応型の検討

e因子±反応型では、有意差はあったが、連関係数が0.1と低かった。詳しく調べてみ

ると次のような出現状況になっていることが分かった。

表38 第1回目と第2回目以降の反応型の変化：e因子±反応型

第1回目の反応	衝動像	P	出現率 (%)
	因子	e±	
第2回目以降の反応型	+	67	22.48
	-	104	34.90
	±	60	20.13
	0	67	22.48
合 計		298	100.00

第1回目 e ± 反応型は、第2回目以降では、e - 反応型に変化して出現しているのが34.90%で、第1位である。第2位は e + 反応型に変化すると、同率で e 0 反応型に変化するものが22.48%となっている。e ± 反応型は、本来は「怒りや憤怒を抑制しようとしている状態」を意味する反応型である。それが第2回目以降は e - 反応という「怒りや憤怒の衝動が存在している」反応型を示しやすいのは、臨床的には納得のゆく内容といえる。次に e + 反応型への変化は、「怒りや憤怒の衝動が内在化して、善的な感情衝動となって表出している」ということを意味するし、また e 0 反応型への変化は、「怒りや憤怒の衝動が開放され、表出している」ということを意味し、いずれも e ± 反応型が変化する場合に可能性が高いことは十分にうなずける結果といえる。

いずれにせよ e ± 反応型は、「怒りや憤怒の衝動が存在している」ことを示していると考えられる。

#### P 衝動像の e 因子 0 反応型の検討

e 因子 0 反応型では、有意差はあったが、連関係数が0.1と低かった。詳しく調べてみると次のような出現状況になっていることが分かった。

表39 第1回目と第2回目以降の反応型の変化：e因子0反応型

第1回目の反応	衝動像	P	出現率 (%)
	因子	e0	
第2回目以降の反応型	+	67	27.92
	-	54	22.50
	±	20	8.33
	0	99	41.25
合 計		240	100.00

第1回目 e 0 反応型は、第2回目以降でも同じ e 0 反応型を示すことが多い (44.25%) ということが調査結果では明らかになっている。もっとも連関係数は低いことから明らかによろしく統計学的な連関が認められない。また2番目に多いのは e + 反応型へ変化する (27.92%) ことが示されている。本来 e 0 反応型は、「怒りや憤怒が開放され、怒りや憤怒が表出して

いる」ことを意味しているので、e + 反応型の持つ「怒りや憤怒の衝動が内在化して、善的な感情衝動となって表出している」への反応変化は、反応型こそ違っているようであるが、軌を一にするものといえる。

第3番目に変化しやすい反応型はe - 反応型である（22.50%）。e - 反応型は、「怒りや憤怒の衝動が存在している」ということを意味しており、e 0 反応型の意味である「怒りや憤怒が開放され、怒りや憤怒が表出している」という反応型への変化には臨床的には矛盾はないといえる。

### Sch衝動像のk 因子±反応型の検討

k 因子±反応型では、有意差もなく、連関係数が0と連関が認められないという結果であった。詳しく調べてみると次のような出現状況になっていることが分かった。

表40 第1回目と第2回目以降の反応型の変化：k 因子±反応型

第1回目の反応	衝動像	Sch	出現率 (%)
	因子	k±	
第2回目以降の反応型	+	41	20.50
	-	104	52.00
	±	25	12.50
	0	30	15.00
合計		200	100.00

第1回目の施行でk ± 反応型を示した場合には、第2回目施行では同じk ± 反応型になることは少なく（12.50%）、k - 反応型に変化することが最も多い（52.0%）ことが明らかになった。k ± 反応型は、「内向して自我収縮へ向かう欲求と抑制的、適応的になろうとする欲求の葛藤状態を反映した緊張傾向」を意味している。非常に複雑な自我欲求が混在している反応型を示している。そうした反応型が第1回目で出現すると第2回目以降の施行では、k - 反応型に変化することが最も多い（52.0%）ことが明らかになっている。k - 反応型は、「自己抑制して、現実的な適応・順応を図ろうとする欲求が強い」ことを意味しており、k ± 反応型がk - 反応型に最も変化しやすい結果は、一種の自我防衛的、自我適応的構えに移行したことを意味しており、臨床的には妥当な推移と考えられる。

### Sch衝動像のp 因子0 反応型の検討

p 因子0 反応型では、有意差はあるが、連関係数が0.1と低く、連関が認められないという結果であった。どのように変化したのか詳しく調べてみると次のような出現状況になっていることが分かった。

表41 第1回目と第2回目以降の反応型の変化：p因子0反応型

第1回目の反応	衝動像	Sch	出現率 (%)
	因子	p 0	
第2回目以降の反応型	+	59	21.15
	-	118	42.29
	±	11	3.94
	0	91	32.62
合計		279	100.00

第1回目の反応がp因子0反応型は、第2回目以降ではp-反応型に変化することが最も多い(42.29%)ことが明らかになっている。第2番目に多いのは、同反応のp0反応型(32.6%)である。p0反応型は、「意志や欲望を含む自我拡大欲求が開放され、減退した状況である」ことを意味するもので、第2回目以降ではp-反応型といった、「自我防衛の状況から羞恥、隠蔽といった不安が先行する状態」に変化することが多いことは、臨床的にも妥当な変化であると考えられる。

#### C衝動像のd因子0反応型の検討

d因子0反応型では、有意差はあるが、連関係数が0.1と低く、連関が認められないという結果であった。どのように変化したのか詳しく調べてみると次のような出現状況になっていることが分かった。

表42 第1回目と第2回目以降の反応型の変化：d因子0反応型

第1回目の反応	衝動像	C	出現率 (%)
	因子	d 0	
第2回目以降の反応型	+	87	20.91
	-	133	31.97
	±	24	5.77
	0	172	41.35
合計		416	100.00

第1回目d因子0反応型の場合は、第2回目以降ではやはり同反応型のd0反応になることが最も多い(41.4%)ことが明らかになっている。ついで第2位では、d-反応型への変化が多く認められる(32.0%)。d0反応型は、「新たな対象への探求欲求が開放され、減退した状態である」ことを意味するが、それが同型のd0反応型以外では、「柔軟性なく頑なになり、固執し、執着している状態」を意味するd-反応型への変化が多いことを示している。Sch衝動像p因子0反応型の変化で明らかになったような精神的にゆとりのない精神的な保全を図る衝動像へと変化する傾向があることが示されている。

## § 考 察

以上、今回の調査で明らかになった点を一覧にまとめると、次の表のとおりになる。

表43 連関係数の低かった反応型の変化方向の調査

第1回目の反応	第2回目以降の最多変化	変 化 の 方 向
h±	h+ (50.0%)	情愛の葛藤・抑制→エロスの情愛
s±	s± (29.5%)	活動性の抑制→活動性の抑制
	s+ (29.5%)	活動性の抑制→活動的
e±	e- (34.9%)	悪的感情の抑制→悪的感情
e0	e0 (41.3%)	悪的感情の表出→悪的感情の表出
k±	k- (52.0%)	緊張・葛藤→自己抑制・自我適応
p0	p- (42.3%)	自我機能減退→自我防衛・不安
d0	d0 (41.3%)	探求欲求減退→探求欲求減退

いずれにせよ±反応型や0反応型は、衝動エネルギーが表出・放出中（0反応型）であったり、衝動エネルギーが抑制・補充中（±反応型）であるという意味を有しているもので、今後の変化が生じやすい状況を反映している反応型であることを考えると、こうした±・0反応型に第1回目と第2回目以降の反応について連関が低く出現したのは、臨床的には当然とも言えなくもない。また連関係数の低い7反応型のうち、その後の変化の第1位に、第1回目と同じ反応型になった因子が3反応型（s±、e0、d0）が含まれており、残り4反応型（h±・e±・k±・p0）のみ第1位の変化において+反応型もしくは-反応型になったことを考えると、第1回目施行と第2回目以降の施行で得られる反応は、結果的には全体的には連関の高いものであることが伺える。

繰り返すと今回の調査でh+反応型からm0反応型まで全て32反応型の内の、わずか4反応型（h±・e±・k±・p0：32反応型中4反応型＝全体の12.5%）に第1回目反応型と第2回目以降の反応型で、第2回目に変化する傾向に一定の法則性という要素が乏しいことが明らかになった。

こうした結果からは、一部の反応、つまり上記のように0反応や±反応には連関の低いものもあるが、1回法実施のソンディ・テスト反応は2回目以降の反応と基本的には連関が認められ、信頼性・妥当性があることが明らかになった。

## 〔参考文献〕

- 岩淵千明（1997）『あなたもできるデータの処理と解析』福村出版  
 岩原信九郎（1957）『教育と心理のための推計学』日本文化科学社  
 奥野哲也（2008）「ソンディ・テスト」金剛出版社『必携 臨床心理アセスメント』



奥野哲也 (2007) (2008) 「被虐待児童の衝動分析と治療的対応について (上) (下)」 佛教大学教育学部論集  
第18号、第19号

奥野哲也 (2006) 「ソンディ・テスト」 創元社『心理査定実践ハンドブック』

奥野哲也 (2004) 監修『ソンディ・テスト入門』 ナカニシヤ出版

大塚義孝 (1993) 『衝動病理学 — 増補』 誠信書房

田中 敏 (1996) 『実践心理データ解析』 新曜社

Szondi, L., Moser, U., Webb, M. W. (1959) 『The Szondi Test』 J. B. Lippincott Company

Szondi, L. (1947) 『Lehrbuch Der Experimentellen Triebdiagnostik Textband』 Hans Huber (佐竹隆三訳  
(1964) 『ソンディ・テスト 実験衝動診断法』 日本出版貿易)

Szondi, L. (1944) 『Schicksalsanalyse』 Hans Huber

#### 〔付記〕

本研究は、平成19年度佛教大学一般研修の成果としてまとめたものである。

なお統計的検討の部分については、佛教大学教育学部臨床心理学科の免田賢准教授に指導いただいた。共に感謝の念を込めて付記する。

(おくの てつや 臨床心理学科)

2009年9月24日受理

